
Out Of Order

桜星 雨夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Out Of Order

【Nコード】

N2494B

【作者名】

桜星 雨夜

【あらすじ】

それは壊れた未来の世界に生きる、「殺人狂」と「家出娘」。孕んだ運命は、誰が選んだものだったのだろうか。

File・00 Out Of Order (前書き)

この小説はダーク・流血・暴力表現を含みます。
苦手な方は避けるよう、お願い致します。

File・00 Out Of Order

混沌世界。

殺人等、日常茶飯事。

繁華街では少し奥に行けば死体が転がっているような腐敗しきった、崩壊を待つ世界。

そんな世界の都心に、その高層マンションはあった。最上階、豪華にあしらわれたであろう部屋はシンプルに装飾されている。

その部屋の住人が、その男だった。

暗い紅の長髪に、鋭い闇色の瞳。

長く伸ばされた前髪で、顔の右半分が隠されている。

白のカッターシャツにジーンズというラフな格好に、両手には黒のレザーグローブ。

ソファに深々と腰掛けて、彼は暇そうに手の上で小さなナイフを回していた。

不意に、遠くで大きな音。

その音に男はくすくすと楽しそうに笑って、首だけを動かして部屋の入り口を見る。

ドタバタと誰かが駆けてくる音、近づいてくると同時に大きな音を立てて扉が開かれた。

「鎖^{かぎ}以^もいつ！」

「はいお帰^{かえ}りー香^か李^りチャン」

「お帰りじゃねえっ！今時玄関口に水入ったバケツ仕掛けるヤツなんかいねえぞバカッ！」

「見事に引っかけたて俺は嬉しいよ」

に、と口元を歪めて笑う男に、入ってきた女は盛大に溜め息をついた。

全身黒のパンク系の服装を纏った女は、頭からつま先までびしょ濡れ。

紫の髪がべったりと頬に張り付き、蒼の瞳の中で怒りの炎が燃えている。

「片付けて雑巾掛け」

「香李がやってくんだろ？」

「…殺すぞこの殺人狂」

「やれるもんならやってみろ、家出娘」

もう一度、今度は疲れきった溜め息を吐いて、女は部屋を出た。

男はそれとほぼ同時に視線を元に戻して、再度ナイフを回し始める。

その数十秒後。

タオルを首に掛けて現れた女に、男は思い切り水をかけられていた。

「…香李」

「はー、やれやれ、これで片付ける気になった」

「…おい、こおり」

「私はこうりだけど何馬鹿鎖以」

「俺に水ぶっかけるたあ、いい度胸してるじゃねえか」

「仕返し。やり返されたくないや私に嫌がらせすんのやめな」

「やだね。俺の生き甲斐だぜ？嫌がらせ」

「それを私にすんなつつつてんだよ」

黒と蒼の視線が交わって、ばちばちと火花を散らす。

膠着状態。

不意に男が手を動かそうとした瞬間、女は左側に飛び退く。

次の瞬間には女がいた場所の背後の壁に、ナイフが突き刺さっていた。

先程まで男が手の上で回していたあのナイフだ。

「こら避けるな。今の当たりやお前即死出来たんだぞ？」

「んなナイフ喰らいたかねつつの」

「もつたいない。今のご時世即死なんかなっかなか体験出来ねえぞ？」

「体験したかないつつつてんだよ馬鹿。」

べ、と舌を出して言い放つと、女はさっさと部屋を出ていった。つたく、と小さく呟いて男は立ち上がる。

壁に刺さったナイフを引き抜くと、壁には綺麗に穴が空いていた。こんな穴を空けたのは、今月何回目だろうか。この修繕は男の仕事だった。

不意に、電話が音を立てる。

雑巾を片手に女が走ってきた。

電話の前に立つと一呼吸置いてから、受話器を取る。

「はい」

『Out Of Order』

「畏まりました。何の御依頼でしょうか？」

『氾丞 鎖以にとある人物の殺害を依頼したい』

電話の向こうから聞こえたその言葉に、男はうつすらと笑みを浮かべた。

殺人。

それは男の、仕事。

世も腐ったものだ、と男は思う。

男の首には、1000億以上の賞金が賭けられている。

にも関わらず、男を必要とする人間は後を絶たない。

男に殺人を頼むということは、自分の命も危険に晒すという事。

どこからか男の連絡先を手に入れ、連絡してくる人間がいるのがその証拠。

「…では、明日午後3時、クロイズシティヒルズにお越し下さい。詳しい話はその際に」

電話の向こうの相手と話がついたらしい女が、かちゃんと音を立てて受話器を戻す。

その瞳が男を見て、悪戯に笑む。

「良かったじゃん、鎖以。依頼で」

「ああ。…久しぶりに楽しめそうだなあ」

男の名は、はんじょう 鎖以。

腐敗した世界を象徴するかのように存在する、殺人狂。

F i l e ・ 0 1 A M o o n l i t N i g h t (前 書 き)

この小説はダーク・流血・暴力表現を含みます。
苦手な方は避けるよう、お願い致します。

File・01 A Moonlit Night

「もーちよつとき、ほら、抵抗するとか俺に喧嘩売るとか、そーゆーの出来ねえの？」

かちゃん。

かちゃん。

金属音が、室内に響いていた。

部屋の中には2人の男。

1人の男は天然の茶髪に茶色の瞳、どこにでもいそうな男。その男は床にへたり込んで、壁際に追いやられていた。もう1人は、紅い長髪に黒瞳の男。

――殺人狂、汜丞 鎖以。

鎖以の左手の上では、くるくるとナイフが回されていた。そのナイフはやけに鋭い銀光を放っている。

「殺し甲斐がなくて困るな、最近のターゲットは」

クスクス。

可笑しそうに笑って、鎖以は手を止めた。

男の身体がビクリと震える。

さして気にもせず、鎖以は男の前に腰を下ろす。

び、とナイフの切っ先を相手の鼻に向けた。

僅かでも動かせば、血が流れる距離。

「2億」

「…え」

「お前の命の値段。これまたやつすく売られたもんだな」

クスクス。

鎖以は笑うのを止めない。

呆然とする男に、鎖以は笑みを濃くした。

酷く楽しげな。

どこか恍惚とした、笑み。

「俺への依頼の最低金額が、1億」

「いち、おく」

「つまり俺の中で人の命の価値は最低1億ってワケだ」

「はあ」

「今までの最高金額は7800億だったかな…そんだけ出すだけあって、なかなか骨が折れる楽しい仕事だった」

思い出すように呟いて、鎖以は手を動かした。

つぷり、と男の鼻の皮膚が切れる。

つ、と玉になった血が流れ出す――が、男は声を出さなかった。正確には、出せなかった。

与えられるのは圧倒的な恐怖。

鎖以の瞳の中には、ただ1つの感情しか存在しない。

純粹な、狂気。

殺意も何もない、あるのは狂気だけ。

人を殺す事を至上の幸福とする、狂った悦楽。

鎖以はゆつくりと手を動かす。

ゆつくりと、切れる範囲が広がっていく。

鼻の頭から眉間へと薄皮を切り取って、鎖以はすつとナイフを離し

た。

じんわりと流れ出ている男の血に指を這わせる。
そのまま傷口に、爪を立てた。

「ッ!？」

痛みに男が瞠目する。

けれど鎖以はやめない。

寧ろ楽しそうに、傷に爪を立てていく。

立てて、食い込ませて。

挟る。

「斬殺つてさ、殺しの中で最も芸術的だと俺は思っただよね」

「ひっ…ぐ」

「焼殺とか絞殺とか銃殺とか色々あつけど、そういうのは俺的にはあんま好きじゃない。得物に頼ってる感アリアリだし。

ナイフはホントいいよな。近距離もいけるし中距離もいけるし。

ま、流石に遠距離は厳しいけど。死体のアートも出来るし…ま、バラバラ死体とかはまた俺の好みから離れるんだけどさ」

ぶつぶつと。

独り言のように呟きながら、鎖以はナイフを持ち換えた。

左から、右へ。

「ま、値段は安いけどお前はラッキーだよ。俺に殺されるんだから」

「っ…」

「天国に逝ける事をお約束致します。…さて、ショータイム、始めるか」

瞬間。

室内に絶叫が響き渡った。

男の左腕にしっかりと突き立てられたナイフ。中を抉るようにナイフを動かして、鎖以は男の反応を窺っていた。その表情は、あまりにも楽しげ。

ナイフを刺したまま、鎖以は2本目のナイフを取り出した。そして今度は男の右腕へ。3本目は、右足太腿へ。

床は紅の血で染まっていく。その血の色に自分の衣服を染めながら、鎖以は笑む。純粹な、狂気のままだ。

どこも致命傷を避けて、4本、5本、6本とナイフの本数を増やしていく。

まるでその場に張り付けるかのような所作。何本も、何本も。

やがて、男から声が上がらなくなった。そんな体力は失われてしまったのだろう。出血量もかなり多い——そろそろ、限界か。ち、と鎖以は舌打ちをして立ち上がる。全身を紅に染めて。

その色は髪の色と融けあって、何処か幻想的だった。

男に興味を失ったように、鎖以は部屋の入り口へと向かう。扉の前に立って、ふと振り返った。何かに気がついたように。

「…ほつといても死ぬんだろうけど、一応依頼内容は殺害だった、
そういや」

表情に浮かんだのは苦笑い。

またもう1本、鎖以はナイフを取り出した。

どこにそれだけのナイフを仕込んであるのかと疑うくらいの本数を、
彼は常時所有しているのだった。

す、と右手に持って、構える。

ゆつくりと鎖以の黒い瞳が細められた。

映るのは最早顔を上げる事すら出来ない、男の姿。

「—— Good bye . Welcome to H E A V E N .

」

ゆつくりと。

にこやかに。

その言葉を紡いで、鎖以はナイフを投げた。

そのナイフは的確に男の首頸動脈を切り裂いて——血を噴出し、
男は絶命した。

こきり。

首を慣らしながら、鎖以は外気に触れた瞬間に伸びをした。

血で濡れたシャツやジーンズが肌に纏わりついて、気持ち悪い。

手にも血の痕。

それを暫し眺めた後、鎖以は舌を伸ばしてその血を舐めた。
途端、顔を顰める。

「…まっじい血」

ぼそり。

呟いて、空を見上げる。

人工的な光の並に隠れて、輝いている満月。

狭い空で、何とか存在しようとするように。

最も美しい光であるはずの自然の光は、殆ど人工の光に掻き消されていた。

「鎖以」

不意にかけられた声に、鎖以は視線を前に向ける。

路地の壁に、香李が寄りかかっていた。

その瞳には僅かな嫌悪。

何年も一緒にいるというのに、香李は仕事を終えた後の鎖以を常にこの瞳で見る。

血を厭うように。

「ハロー香李。お迎え有難う」

「ハローって時間はとつくの昔に終わってんだよ馬鹿。さっさと着替えろ」

乱雑に投げつけられた紙袋を、鎖以はあっさりとキャッチする。

その中身はいつもと同じだと知っているから、敢えて確認もしない。
中身を取り出す事なく、鎖以は壁に凭れかった。

そのまま瞳を細めて、空を見上げる。

「…今日は月が綺麗だなあ。」

「おいこら。気持ち悪い似合わない事言っていないで着替えろっつの」

「香季さー、お前女なんだから自然物見て感動しろよ綺麗だなーと思えよ」

「この世の中のモンに綺麗なもんなんざ一個も残っていない」

断言する香季に、鎖以は笑う。

自然に、穏やかに。

「ま、確かに」

見上げた夜空には、輝く満月。

その美しさは、遠い昔に失われてしまった。

この世は汚い。

崩壊を待っただけの、世界。

「…さつさと滅びりゃいいのにな」

小さく。

誰にも聞こえないように、鎖以は口の中で呟いた。

F i l e ・ 0 2 S m o k e O f P o w d e r (前書き)

この小説はダーク・流血・暴力表現を含みます。
苦手な方は避けるよう、お願い致します。

File・02 Smoke Of Powder

浮かぶのは何時だって狂気だけだ。

一気に拡がった殺気に、賞金稼ぎ達が後退さる。

彼らは名を馳せた、実力派の賞金稼ぎのグループだった。

鎖以も彼らのグループの名前——『A P e』というらしい——
くらいは聞き覚えがある。

いつもなら、楽しめる。

自分の命を狙っているのだから、殺してもいい人間だ。

だから、喜んで、殺す。

けれど。

今日の鎖以は、虫の居所が悪かった。

「俺を捕まえにくるたあ、いい度胸だな。学校とやらで習わなかったか、——『氾丞 鎖以には手を出すな』って」

「そ、んな、こと、は」

「ああ、習うわけねーか。賞金稼ぎに賞金首捕まえんとは言えねえよな。けど、言外にお偉いさん方は言ってるハズだぜ？」

あん中には何人か、俺のお得意さんの腐った輩がいるからな」

鎖以を捕まえるという事。

それはつまり、金で動く殺し屋を失う事。

政府の高官達も、それを本意としないだろう。

いつの時代だって、必要なのだ。

闇の部分を担う、汚れ役は。

今の鎖以は、丸腰だ。

ナイフ一本、持ってやしない。

けれど、彼には簡単な事だった。

素手で、目の前にいる賞金稼ぎ達を殺してしまうなんて事は。

呼吸をする事と、人を殺す事は、鎖以にとつては同義。

「…ったく、何も知らない賞金稼ぎほど間抜けな生き物はいねえ、なあ…」

溜め息ひとつ。

ゆつくりと、鎖以は歩き出す。

賞金稼ぎ達がいる方向へと。

それは見ようによつては隙だらけで、見ようによつては隙1つない。

誰一人、鎖以以外は動けなかった。

まるでその場で石像と化したかのように。

ゆつくりと、鎖以は手を振り上げる。

その口端に狂気の笑みが刻まれる。

——瞬間。

「殺すな」

この場には不釣合いなほど、抑揚のない。

のんびりとした、女の声だった。

眉を寄せた鎖以が、声がした方を見やる。

煙草を吸いながら、どうしてもよさそうな瞳をして香李がこちらを見ていた。

「…邪魔すんじゃないよ、香李」

「黙れ殺人狂。何回言ったら分かんだよ、私の前で人を殺すな」

「お前がどっか行きや済む話だろ」

「仕事以外でアンタに人殺しをさせないのが私の仕事なんだよ」

「じゃあ殺そうか、お前も」

「殺せるもんなら殺してみな」

あまりにもあつさりとした口調で、香李は言い放つ。

数瞬鎖以は黙り込んで、好機と思ったか動こうとした目の前の賞金稼ぎの首を掴んで動きを止めさせる。

誰も何も言わない。

夜独特の空気を、静寂が更に黒くする。

沈黙を破ったのは、鎖以だった。

掴んでいた賞金稼ぎの首を、そのまま締め上げて持ち上げる。

声を上げるまもなく賞金稼ぎは投げ飛ばされて、近くの廃ビルの壁に強かに身体を打ちつけて、気絶。

間を置かずに振り上げられた鎖以の足が、別の賞金稼ぎの鳩尾を捉える。

直撃を喰らったその賞金稼ぎも、昏倒。

残り5人、を鎖以は興味なさげに見回して、鼻で笑う。

「…香李に感謝するんだな」

一言、低い声で言い放って。

鎖以は踵を返し、煙草を吸っている香李の元へと歩き出す。
直後。

恐怖に駆られた賞金稼ぎの1人が、奇声を上げて銃を構えた。
ビリ、と空気にヒビが入る。

響いた、轟音。

鎖以は足を止める事はない。

振り返ることもしなかった。

何が起きたのかを、鎖以の目はしっかりと捉えていたのだ。

「…俺に殺すなっつといてお前が楽しむな、家出娘が」

「私はアンタと違うから楽しかねっつの」

鎖以の背後では、悲鳴があがっている。

気を失った仲間を置いて逃げ出す者もいる。

このグループは恐らく、この後解散してしまうのだろう。

鎖以に手を出したばかりに。

命があるだけマシだとも、言えるけれど。

香李の右手には、まだ硝煙を銃口から吐き出している黒の拳銃があった。

その拳銃を香李は無造作に腰に下げているホルダーに放り込む。

それは鎖以が香李に与えた、護身用の銃。

「…腹減ってンでしょ。帰るよ」

「命令すんな」

「飯抜くよ」

「…へいへい」

喧騒から、気配を消して。

2人の姿は、その場から消失した。

File・03 Wreckage Of Memory(前書き)

この小説はダーク・流血・暴力表現を含みます。
苦手な方は避けるよう、お願い致します。

File・03 Wreckage Of Memory

ああ、穢らわしい穢らわしい。

何処の男の落とし子とも知れぬ子。

そんな派手な格好をして、夜毎街を出歩いて。

貴方、自分の立場は理解しているの？

この面汚し。

恥晒し。

生きているだけで、貴方は私達の品位すら貶めるのよ。

穢らわしい穢らわしい。

「ッ……！」

叫びそうになって、目を覚ます。

目に入ったのは、見慣れた黒い天井。

瞬いて深呼吸すると、香李はゆっくりと身体を起こした。
布団とシャツが擦れる音が、やけに大きく耳に響く。

「……ロクでもない」

一つ、溜め息。

背中がじつとりと汗をかいている。

——気持ち、悪い。

若干の嘔吐感に襲われながら、香季はベットから起き上がった。ふらつく足で床を踏んで、部屋を出る。

その瞬間、警戒する事も忘れない。

この家に住んでいる以上、警戒を怠れば死ぬ。

何せ家主は、気分次第でナイフを投げてくるような人間だ。

白いソファの背越しに、暗い紅い長髪が見える。

リビングで寝ていた、という事はないだろう。

鎖以が自室以外で睡眠を取るなんてことは、有り得ない。

つまり、既に鎖以は起きていた、という事だ。

「……おはよう、鎖以」

一応、声は掛けておく。

返事の代わりだろうか、ひらひらと鎖以が手を振った。

こちらは振り返らない。

ナイフの整備でもしているのか、はたまた今度のターゲットの殺し方を考えているのか。

何にせよ口くさな事をしていないのは確かだ。

近寄る事はせずに、香季はそのままキッチンに向かう。

キッチンを使うのは、香季一人。

鎖以に拾われた時、家事全般をする事が香季がこの家にいる条件になった。

それから5年、今やその条件は当たり前前に香季の日常と化している。鎖以が料理をするところなど、一度も見た事はない。

香季が来るまでというやって生活していたのかも、分かりはしない。まあ——料理に関しては、今後も香季は鎖以にさせるつもりはな

いが。

相手は鎖以だ。

包丁を持った瞬間に殺されかねない。

そついう、男なのだ。

それが、氾丞 鎖以の在り方だと、香李はよく知っている。

蛇口を捻って、水を出す。

コップを出すのは億劫で、香李は蛇口からそのまま水を飲んだ。

冷たい感触が、身体の中を伝って落ちていく。

ついでに顔も洗えば、随分と気分は落ち着いた。

息を吐いて、再度蛇口を捻って水を止める。

「えーらく気分悪そうだなあ、香李ちゃん」

「…うつさいな」

顔を上げると、ソファに座ったまま鎖以がこちらを見て笑っていた。

その顔の右側は、相変わらず長い前髪が邪魔で窺えない。

溜め息をついて、香李は鎖以の正面に置かれている黒いソファへと足を向ける。

白いソファは、鎖以の定位置。

黒いソファは、香李の定位置。

これも、5年の歳月の中でいつの間にか当たり前になっていた事だ。

ソファに腰を下ろした香李を、鎖以は楽しそうにニヤニヤと笑いながら見ている。

その視線が、鬱陶しい。

「…人の不幸がホント好きだね、お前は」

「人の不幸は蜜の味、なんて先人はホントいい言葉を言ったなあ」

「…あ、そ」

「んで？やーな夢でも見たか」

にやり。

濃くなる、鎖以の笑み。

分かっている。

全て見透かしている。

分かっている、敢えて問うのだ。

時々、不思議になる。

何故自分がこの男に拾われて、何故こうして一緒に住んでいるのか。
相手は殺人狂。

人を見れば殺したがる、精神破綻しているような人間だ。

…それでも。

あの場所よりは、居心地はいいけれど。

「いつつも言っちゃってんだろー？香季が望むんだったらその悪夢
の原因排除してあげますよ、って」

「…い、や、だ。アンタにこれ以上デカイ顔されたらたまったモン
じゃない」

「居候の分際で何偉そうな事を」

「うっさいなもう」

分かっている。

やってのける、鎖以なら。

この胸を焼くような嘔吐感に苛まれる原因を、綺麗に排除してみせる。

分かっている——分かっている、それでも。

殺して、どうなる？

夢に、見る。

心に、残っている。

今更『いなくなった』ところで、この悪夢はきつと、消えはしないのだ。

「つまんねーの」

眩いた鎖以の手の中で、キラリ、銀色が光って。

当然のように投げられたそれを避けて、香季は苦笑した。

File・04 Encounter Not Forgiven (前書き)

この小説はダーク・流血・暴力表現を含みます。
苦手な方は避けるよう、お願い致します。

世界が、色を変える。

「はい」

『Out Of Order』

「畏まりました。ご用件をお伺いします」

『氾丞 鎖以に依頼したいのですが』

「…では、本日午後11時、クロイズシティヒルズにお越し下さい。
詳細はその際に」

「変な電話だな」

香季が電話を切った、直後。

聴覚を研ぎ澄まして電話でも会話内容を聞いていた鎖以が、ぽつりと呟いた。

怪訝そうに眉を寄せた香季が、鎖以を振り返る。

鎖以はいつものように、ソファに腰を下ろして。

銀色に光る刃を、手の中で弄んでいる。

その表情は、いつもと何ら変わらない。

全てに興味がなさそうな、それでいてどこか楽しげな。

「何、野生のカン？」

「フツ―今から殺しを頼む人間が、冷静に『Out Of Ord

e r」を言えるわけねーだろ」

「…」

「大物とか2回目とかの人間なら、香季は声だけで分かるだろ？」

「そりゃね。あれはハジメマシテの人だった」

「…お前、今日交渉来んな」

「何で。アンタ1人でちゃんと話出来るわけ？」

「いや、多分話しねえから」

「…は？」

ますます表情を険しくさせる香季に、鎖以はそれ以上答えない。弄んでいたナイフの刃を仕舞って、自分のポケットに放り込む。

時計の針は、午後6時を指していた。

クロイズシティヒルズ。

それは、鎖以が常に依頼人との交渉に使う場所だ。

既にその名前は『通称』に過ぎず、現在はただの廃墟。

数年前、クロイズシティヒルズを建てた会社が倒産してからというもの、何の企業もこのビルも買い取らない。

それに目をつけた香季が、交渉場所の確保の為に偽名でクロイズシティヒルズを買い取ったのだ。

基本的には立ち入り禁止、誰かが近づく事はない。

整備もされていないから、本当にボロボロの廃墟だ。

その正面玄関で、鎖以は依頼人を待っていた。

見た目には、丸腰だ。

何も持っていない、ように見える。
それでも、その懐には数本のナイフが入っているのだけだ。

現れた人影に、鎖以は目を細める。

その人物は、闇夜に穴を空けたかのような白の服を纏っていた。
目を凝らす。

そして、鎖以は笑った。

何の前触れもなく、豪快に。

「あははははっ！なるほどな、そういうことか。最近政府の動きがおかしいなあと思ってたら」

「…氾丞 鎖以。貴方ですか、度々機密データベースをハッキングしているのは」

「そ、この俺だよ。ふーん、政府のお偉いさん方はやっとわざと残してある痕跡に気付いたわけね」

くすくす。

笑いの余韻を引き摺った声で、鎖以は言葉を続ける。
その頃には、人影はその全貌を表していた。

暗い、茶の髪。

鋼鉄のような、灰の瞳。

銀の縁を持つ眼鏡が、伶俐な顔にあしらわれている。
着ているのは、白の軍服。

ロングの軍服の裾は、完全に足を覆い隠している。
靴の先がやっと見える程度だ。

陸海空軍のどれでもない、軍服。
肩にある紋章も、見慣れない。
つまりは、最近新設された軍。

しかも、世間的に発表されていない裏部隊、だ。

「初めまして、氾丞 鎖以。私は暗殺特殊部隊『AAO』の一員、
齋木 成燈と申します」

「齋木 成燈、齋木 成燈…ねえ。簡単に名前明かしていいのかよ、
裏部隊の人間が」

「構いません。任務上、私の名前を貴方に明かすことは何の邪魔に
もなりませんので」

「へえ、任務。依頼のフリして俺を呼び出して殺す、ってのが、お
前の任務か」

硝子の向こう側の灰の瞳は、微動だにしない。
揺れない。

まるで、機械でも嵌め込まれているかのように。

色が、存在しない。

無色の感情。

「いえ。今回は、私のことを貴方に知って頂こうと思い呼び出した
だけの話です」

「ふーん。独断行動か」

「そうなります」

「いーのか？勝手なこととして、怒られんぞー？お偉いさん方、うる
っせえからなあ」

「…」

「暗殺特殊部隊、か。んなもん出来たら俺のことなんか邪魔でしや
ーねーよな。」

今まで俺に手を出せなかったのは、俺殺しちゃったら邪魔モン殺
すヤツがいねえからだっただけ。

…それに、色々機密事項も知ってるから、生かしちゃおけねえっ
てか」

ぶつぶつと呟きながら、鎖以はナイフを取り出した。
銀色は、月の光を浴びて白く光る。

男は——成燈は、それでも表情一つ変えなかった。
殺人狂。

裏の世界、全ての者に畏怖される「氾丞 鎖以」を前にして。
真っ直ぐな瞳で、ただ鎖以を見つめている。

「……ちよつと、殺しあつてみるか。成燈ちゃん？」

くすくす。

やはり、その表情は狂気に満ちた笑顔で。

何も答えることのない成燈に向けて、ナイフを投げた。

狙うは、心臓。

ごく自然な動作で、成燈は動く。

一步そこから退くように、右側へ。

ナイフは成燈の心臓が在った場所を通つて、どこかへと消えていく。
からん、とどこかでナイフが落ちる、小さな音がした。

「軌道を読む、くらいのことは出来るんだな」

「……初歩的なことです」

「なるほどなるほど。ちつとは殺し甲斐ありそうだな、プロの軍人
だし」

「私は、貴方に殺されるつもりはありません」

「あ、そ」

つまらなさそうな声で言い返して、舌打ち。

しかし、そのまま鎖以は視線を止めた。

微弱ながら成燈の表情が変化したことを、鎖以の目は見逃していなかった。

「…汜丞 鎖以。いや…」

成燈の唇が、音を発さずに動く。

瞬間、鎖以の表情が強張った。

能面のように、表情が消えていく。

「齋木 成燈。それが私の名前です。記憶にありませんか？」

「…な」

「忘れたとは、言わせません」

「…」

「どちらにしろ、よく記憶しておいて下さい。…貴方は、私が殺します」

静かな瞳に、炎が燃えた。

声なく、鎖以は笑う。

それはいつもの狂気に彩られた笑みではなく、人間らしい、楽しそうな表情だった。

「…よく、覚えとくよ、成燈ちゃん」

それが、この先の運命を狂わせる2人の邂逅だった。

File・05 Night Of Monologue

思い出せるのは、あまりにも鮮明な『紅』。

「クソ、夢見悪イ」

小さく呟いて、鎖以は身体を起こした。
窓の外は、まだ暗い。

時計に目をやれば、『A・M・04:27』の文字が浮かび上がっていた。

仕事を終えて帰ってきたのが、2時。

風呂に入って、そのままベッドに直行して——これだ。

あまり、眠れていない。

尤も、睡眠を取るという行為に対して鎖以は然程重要性を感じていないが。

眠れそうに、ない。

諦めて、鎖以はそのままベッドを降りる。

適当な上着を羽織って、部屋を出る。

シン、とあまりにも静かなリビング。

この時間だ、香季は熟睡しているだろう。

もしかすれば悪夢を見ているかもしれないけれど、鎖以が関与する

ことではない。

自分の為にしか生きない。

だから、余程のことがない限りは、誰も助けない。

鎖以はその主義を徹底している。

自分が『拾った』香李すら、例外ではない。

「……やれやれ」

苦笑して、すとズボンのポケットから煙草を取り出した。

入れたまま眠っていたせいで、ひしゃげてしまっている。

そんなことは気にも留めずに、鎖以はライターで煙草に火を点けた。暗い部屋を僅かに照らして、火は失せる。

——火。

吸い込んだ煙を味わって、吐き出す。

立ち上る白は、酷く汚れた色だ。

「……あー。誰か、殺してえ」

ぼつり。

呟いた言葉は、本心だ。

誰かを殺すこと。

存在を殺すこと。

それは鎖以にとっての、精神安定方法。

殺人狂。

そう、呼ばれるようになって。

その、存在になって。

もう、どれだけの時間が過ぎ去ったのだろう。

——考えたくも、ない。

思い出すつもりはない。

感傷に浸るつもりもない。

自分が今こうしているのは、そういう道を歩いてきたからだ。
後悔するつもりも。

懺悔するつもりも。

微塵も、ない。

ふと思い出したのは、灰色の冷たい瞳を持った男。

斎木 成燈と名乗った、『AAO』とやらの。

「…成燈ちゃんに会ってからだな、どーにもこーにも」

浮かぶのは、やはり、苦笑だ。

煙草はどんどん灰と化していく。

吸うという行為が煩わしくなつて、鎖以は灰皿に煙草を投げ入れる。
僅かな火が、灰皿の中で燃えている。

『貴方は、私が殺します』

初対面で投げかけられた、あの言葉。

嘘偽りのない、憎悪の炎を見た。

瞳の中で燃える炎は、狂気の片鱗だ。

クスクス。

自然と漏れる笑みは、誰に対する嘲りか。

何を考えていても、どうせなるようにしかならない。
何時間か経てば、香李が起きてくる。

いつものようにくだらないやり取りをして。
時折かかってくる仕事の依頼を受けて。

日々はそうやって、単調に過ぎていくしかないのだ。

狂ったはずなのに。

日常は、無為に、過ぎて。

取り出したナイフ。

銀の煌きが、夜の闇と鎖以を映しだす。
暗闇の中に浮かぶ紅。

そつと、鎖以は前髪を掻き上げた。

普段隠しているその箇所にあるもの。
それを静かに見つめて、鎖以は再び前髪を下ろす。

「…呪縛からの解放なんか、有り得ねえ理想論だな」

呟いて、鎖以は瞳を閉じた。

瞼の裏の暗闇に、意識を集中させる。
何も考えない。

何も思い出さない。
——何も、見ない。

「…俺は、『氾丞 鎖以』、だ」

言葉を生み出す唇を、瞳を閉じたままナイフの表面でなぞる。

冷やかな感触が、唇に伝わる。
冷え切った金属の味。

それは酷く、甘美だ。

だから鎖以は、ナイフを選んだのだから。

「アイツじゃ、ねーんだよ。…残念だったな、成燈ちゃん」

ちいさく呟いて、鎖以は瞳を開けた。

静かに、笑う。

——その笑みは、狂気に彩られていた。

File 06 Existence To Expiate (前書き)

久しぶりすぎて申し訳ありません…。
気にしてくださる方がいらっしゃいましたら、どうぞ。

「齋木」

聞き慣れた声に名を呼ばれて、パソコンから顔を上げる。

よく見知った上司がそこに立っていて、成燈は静かに頭を下げた。

『A A O』創設者、蓮白 恭二。

『A A O』は暗殺特殊部隊と銘打っているが、その仕事のほとんどはデッドオアアライブの賞金首の始末だ。

政府の高官達の反対を押しきって、恭二が作り上げた部署。

『偉い』人々が反対する理由なんて火を見るより明らかで、最終的に賞金稼ぎを統括する部署、という形で恭二は『A A O』を作り上げた。

成燈はそこで彼に、拾われたのだ。

それまでは陸軍所属の軍人として、日々を生きていた。

「氾丞 鎖以を担当しているのは齋木だったね」

「ええ。賞金稼ぎ達が手を出すのを恐れていますので、私が直接追っています。それが何か」

答える声に、淀みは全くない。

人間味を感じない、感情のない、ひどく機械染みた。

そんな成燈に恭二は苦笑して、隣の空席に腰を落とす。それに従って、成燈の視線の位置も変化する。

懐から煙草を取り出して、恭二は力チリと火を点けた。立ち上る紫煙は、濃い。

「健康を害しますよ」

「俺はもう46なんでね、この世界に足を踏み入れてこの年まで生きている方が奇跡的だよ」

「それは蓮白さんの実力でしょう？」

「言ってくれるね、殺しの実力か。…裏の仕事は手を血に染める。斎木、君は嫌にならないのか？」

成燈は答えない。

表情を変えることもしない。

無感情に恭二を見つめる瞳は、欠片も動揺を見せない。

数瞬でいて、長い沈黙。

紫煙が一面に散った頃、成燈はようやく口を開いた。

「…私は、命じられたことを実行するまでです」

「しかし、汜丞 鎖以の件は君が自ら立候補したと聞いたよ」

「政府要人御用達のプロの殺し屋、依頼成功率100%、狂気の殺人狂。政府から妨害される可能性もありますし、並大抵の人間に汜丞 鎖以を追うことなど出来ないと思います」

「ほう。そこまで言うということは、自分なら汜丞 鎖以を仕留めることが出来るという自信が？」

「いいえ」

即答。

返ってきた答えに、恭二は瞠目する。

そこで、成燈は恭二から視線を外した。

その瞳はパソコンに戻って、キーボードの上で指が踊り始める。無機質な音。

まるでそれは、成燈自身のように。

「汜丞 鎖以を消すのは、汜丞 鎖以自身でしょうから」

「…どういう意味かな」

「そのままの意味ですが、まあどう取って頂いても構いません。ああ、先日汜丞 鎖以と接触しましたので、後でその報告書をお持ちします」

「…汜丞 鎖以と、接触？」

「ええ。何か問題が？」

「いや…」

口に手を当てて、恭二は思考に耽る。

汜丞 鎖以。

どの実態を知る者は、いないに等しい。

名前は偽名、本名不明、年齢・生年月日・出身地不明、分かっているのはその外見だけだ。

少し探れば汜丞 鎖以に依頼したところのある政府の高官を洗い出すことなど、恭二には簡単な話だ。

それが出来ないのが、組織の面倒なところ。

汜丞 鎖以に会うには、偶然街で擦れ違わない限りは汜丞 鎖以自身に依頼しなければならない。

——つまりは。

成燈は何処から汜丞 鎖以の連絡先を突き止め、依頼と称して汜丞 鎖以に染色した可能性がある、ということ。

「蓮白さん」

「あ、ああ…何？」

「汜丞 鎖以の件についての詮索をこれ以上お受けするつもりはありません。他に用件がないのでしたら、部下に示しがつきませんの

でご自分の仕事に戻っていただきたいのですが」

「部下と交流を深めたい、という理由と用件は駄目かな」

「適当な理由をつけて職務放棄するのは怠惰過ぎます」

「それは、手厳しい」

くすり。

仕方なさそうに恭二は笑って、立ち上がる。

その姿を、成燈が追うことはない。

視線はパソコンのディスプレイのみに向けられていて、文字の羅列が静かにディスプレイを埋め尽くしていく。

その姿に溜め息を吐いて、恭二は足を部屋の外へと向けた。

けれど、不意に。

部屋の扉に手を掛けて、恭二は成燈を振り返る。

成燈の姿は、先ほどまでと何ら変わらない。

精密機械なのかと疑ってしまいたくなるほど無表情に、仕事を続けている。

「… 斎木」

「はい」

「氾丞 鎖以を狂気の殺人狂だと、言ったね」

「ええ」

「感情を差し挟まず任務として人を殺している君は、彼と同類だと思っただけではないのか？」

びたり。

キーボードを叩いていた手が、止まった。

表情は変わらない、動揺もしない。

無機質の、鋼鉄のような灰色の瞳が、静かに恭二を見つめる。
あまりにも感情のない、瞳。

薄く、その唇が開かれる。

「同類でしょうね。私も、貴方も」

淡々と。

感情を込めることもなく、あつさりど。

静かにその言葉を紡ぐ成燈の瞳は、決して恭二から逸らされることはない。

己の罪を知って。

それでも尚。

感情が亡いのは、彼の贖罪なのかもしれない、と。
そんな想いが恭二の頭の中に過ぎって、消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2494b/>

Out Of Order

2010年10月26日01時14分発行